

葬
井
雪

葬雪

息を吸うだけで肺が痛むほど、凜と冷えた夜だった。昭久は社長に頼まれて同僚の高杉とともに通夜の手伝いをするようになった。故人となったのは社長の祖母で、面識もなく当然乗り気ではなかったが、かといって断る口実もない。会社で一番に年が若かったせいもあり、体よく駆り出された。高校を卒業して今年から勤め始めたばかりだ。家族が嫌でたまらなくなって家を飛び出してきたのだが、離れてみると何がそんなに嫌だったのかははっきりと思いつけないときもある。

斎場で昭久は受付に立って弔問客の案内をした。斎場となっている社長の家は古いが相当に広い。元々このあたりでは名の通った地主なのだという。弔問に訪れる客も多かった。

昭久は訪れる客から香典を受け取りながら、提灯に照らされた漆黒の夜に雪の気配を感じた。昭久には雪が降るときの感覚が何となくわかる。それは普段にくらべてわずかに青みを帯びる空の重みであったり、つんと鳴るように張りつく空気だったりした。微妙な感覚ではあるがいつもははっきりとした予兆があって、それに気がついたとき、昭久の予想はまず外れることはなかった。

「いま空いているから、順番に焼香をしてくれないか」

客足が落ち着いてきた頃になって屋敷から社長が寒そうに手を擦りあわせてやってきた。言われるがままに社長と入れかわりに斎場となっている内庭に向かう。母屋の縁側に面した部屋が開け放たれて祭壇が用意されていて、壇上には会ったこともない老人の写真が穏やかな微笑で飾られている。慣れない行為に緊張しながら不器用にお辞儀をすると、祭壇の近いところから社長の奥さんと二人の子供の姿が見えた。奥さんとは休日に駅前の靴屋で偶然ぼったり社長と鉢合わせて、そのとき一度だけ挨拶をしたことがある。小柄な大人しそうな奥さんだ。社長は会社の飲み会によくフィリピーナの愛人を連れてくるが、その席に奥さんが来ることはない。

誰にも視線を合わせず、ごまかすように焼香を済ませた。そのまま内庭をぐるりとまわって返礼品を差し出されるまま受け取る。家屋同様に広く立派な庭には煌々と照明が灯され、灯籠や池が深い影を落としていた。所々に木が――恐らく松だと思うが、昭久にはおおまかな種類しかわからない――植えられていて、なかでも庭の外れにあるイチヨウがとくに大きく目を引いた。すでに葉は落ちきっていて、ただ長く細い枝を冬空めざして突きだしている。

そのイチヨウの高いつぺんをぼんやりと見上げていると、ゆるやかに幼い日の記憶が降り注いだ。

*

引っ越しの多い生活だった。父が事業に失敗して福岡から逃げるように各地を転々としていた。小学校二年の秋には、田舎の畑と林にかこまれた古びた平屋に居を構えた。幼かったせいもあり、その場所が具体的にどこだったのかはよく憶えていない。どこか東北のほうだったと思う。翌春にはまた引っ越ししてしまったのだが、その町はいったん雪が降りはじめからは冬のあいだずっと雪が積もりっぱなしだったのを憶えている。

家の隣にある畑はだれが耕しているのかネギや大根などが植えられていて、向かいには斜面に雑木林が広がっていた。雪が降る前までは母が昭久と、そのひとつ上の姉、七つ下の幼い弟を連れてよく散歩した。父は東京に仕事を探しに出ていてほとんど家にはいなかった。来た当初の雑木林はイチヨウが地面に黄色い絨毯を敷きつめて、ふっくらとした銀杏の実をその葉っぱに負けず地上に撒き散らしていた。母が食べるというので姉と二人して実をかき集めた。用意したビニール袋がすぐにいっぱいになる。そのとき記憶にある弟を抱いた母の顔は逆光のようにおぼろげだった。はたして笑っていただろうか。すぐに激昂する父と違って、母はいつも無口だった。

*

受付に戻ってしばらくすると、案の定というべきか粉糖のようなこまかい雪が、淡く風にあおられて宙を舞いだした。恐らく今年の初雪で、弔問客からも感嘆の声があがる。記帳をする老人の丸まった背中を眺めながら、昭久は白く大きいため息をついた。苛立ちとためらいをない交ぜにしながら、雪は徐々にその勢いを強めている。

*

あの町ではじめて雪が降った日も寒かったに違いなかっただろう。

翌日、通い出したばかりの小学校では体育の授業が雪遊びに変更された。前日から降りだした雪はすでに校庭や遊具を真っ白に染めあげていて、クラスメイトたちは雪玉を投げあい、犬のように駆けずりまわった。そのなかで昭久だけが校庭の隅に立ちすくんでいる。

「雪はどうだ？ 九州では降らんかったのだろう？」

昭久がいっこうに遊びに加わらないのを見て、担任の若い先生はそう言った。

九州でも雪が降ることをこの先生は知らない。昭久が福岡に住んでいた頃に一度、積もった雪が氷になって車庫から車が出せなくなったことがあった。父が仕事に遅れると愚痴をこぼしながら凍った地面にやかんで沸かした湯を撒いていたのを楽しみ気持ちで見ていたのを、昭久は憶えている。

「雪は初めてじゃない」

と言いたかったが、先生の前でうまくそのことを口に出すことができなかった。先生は何も言わない昭久に飽きたのか、その場を離れてまたほかの子たちと遊びだした。

昭久はじっと頭を垂れて足下を見つめた。土地に慣れた子供たちはみなゴム長靴で、昭久だけがスニーカーを履いている。すでにびしょぬれになっていた。まだみぞれまじりの白い結晶が降りつづくなかで、とけた雪が靴を浸透してつま先がじんじんと痛む。ひとりスニーカーでいることがたまらなく恥ずかしいことのように思えた。

「雪は初めてじゃない」

誰もいなくなってから言い訳のようにつぶやく。凍えた足を震わせながら、校庭がどんどんとあずき色に変わっていくのを昭久はただじっと眺めていた。

いま思えばその頃から自分の気持ちを表すことが苦手だった。そのせいで思い出には後悔を思い浮かべるものが多い。そばで社長の親戚たちが、亡くなった女性がこの町で一番の長寿だったと話をしている。九十七歳だったそうだ。大往生だろうとまた別の誰かが言った。

「ふう。なんか暖かいもの食べたいなあ」

高杉が隣で足踏みしながらひとりごちた。客足が途絶えてすっかり閑散とした受付で、闇夜に雪が降りつづく様子を二人でぼんやりと眺めた。暗くても雪だけは灯りを反射してよく見える。このぶんだと翌朝にはかなり積るかもしれない。

「この天気じゃもう来ないだろ。もう片付けるから帰っていいよ」

社長が先ほどと同じように手をすりあわせて寒そうに屋敷から出てきた。かれこれ二十分はただ突っ立っているだけだった。

「ご苦労様。これバイト代ね」

社長が内ポケットから白い封筒を取り出して二人に手渡した。黙って受け取ると、あとから奥さんもわざわざ挨拶にやってくる。何度も丁寧に礼を言われて昭久はかえって恐縮した。

*

ある日東京から父が帰ってきて家族で鍋をした。白菜と豆腐、それからわずかばかりの肉が入っただけの水鍋でいかにも侘びしかった。物足りない気持ちを察したのか、父はおもむろにジャンパーを羽織ると外に出て、隣の畑で栽培していたニラを勝手に引き抜いてきて鍋に入れた。父にしてみれば大したことではなかったのかもしれないが、昭久は父が当たり前のように盗みを働いたことにショックを受けた。母は顔をしかめたが、それは父の行為をとがめてのことなのか、この暮らしを嘆いてのことだったのかはわからなかった。雑木林で銀杏を拾ったときも、はたして母は同じ顔をしていたのだろうか。

*

「すげ。四万円も入っているよ」

帰り道、駐車場へむかう道すがら高杉が驚嘆した。昭久も封筒の中身を覗き込むと確かに四万円入っていた。もともと社長は給料の安い二人にバイトさせるつもりだったのかもしれない。そんな気がしてきた。

「これで年始はすこし裕福に過ごせるな。これから なんか食べに行く？」

寒さで鼻を赤くした高杉が上機嫌で訊ねてきたが、昭久は明日も早いからと断った。

砂利を雪で白く染めた駐車場で別れてそれぞれの車に乗る。ドアを閉めると車内は外とは違う別の世界にあるような安心感があった。先に高杉の車が小さくクラクションを鳴らして出ていく。昭久はエンジンを暖めるためしばらく駐車場にとどまった。暖房が効いてくるとようやく心地つく。それから手持ちぶさたで助手席に放っておいた返礼品の手提げ袋を開けると、中には礼状とやぼったいハンカチ、清めの塩が入っていた。アパートに帰っても誰もいない。途中で誰かに塩を振ってもらったほうがいいのだろうかと思昭久は考えた。

そのとき昭久はあの雪の町で出会った人間を一人思いだした。名前は忘れたが小学校のクラスメイトにベトナムから来た子がいたのだ。浅黒くて針金のように手足の細い少年だった。五歳のときに来日して、はじめての学校でオムツをしていたのが自分だけで恥ずかしかったという話を、昭久はおかしくて何度も聞いた。家もたしか近所のはずで、何度か遊びにも行ったはずだ。なぜ急に思いだしたのか、昭久自身にもわからない。

ただ、昭久には両親も、ベトナム人の少年も、死んだ社長の祖母も、なんだかみんな同じ過去の薄ぼけた固まりにしかならなかった。自分以外の何者もはっきりとした形を表さない。もし父や母が死んだとき、葬式の写真は誰が用意するのだろうかと思昭久は思う。あの老婆のような写真などは、一枚たりとも持つてはいない。

フロントガラス越しに見遣る外の景色は、街灯から発せられる青白い光が暗闇に吸いこまれるように消えていった。そのなかで雪だけがいつまでも降り続き、どこまでも終わりが無いように思えた。

あとがき

このお話については三題噺ではなく、雪から連想されました。

.....少しでも楽しんで頂けましたでしょうか？

半分以上は自分の経験をつぎはぎしたもので、エッセイに近い物があるかもしれません。

雪はとても神秘的な存在で、誰もが感傷的になるのではないのでしょうか。

(雪国に住んでいらっしゃる方はそんなことないかもしれませんが；)

最後まで目を通して頂いた、すべての方に感謝をいたします。

2012/11/2 第一版

2014/1/15 第二版 文言修正

コメントに感想など頂けると嬉しいです。